

所属	心理学研究科 現代心理学専攻 修士課程	修了年度	2020 年度
氏名	野村 茉愛	指導教員 (主査)	河野 理恵

論文題目	大学生の親子関係における役割逆転が自己に関する諸特性に与える影響
------	----------------------------------

本文概要

【問題・目的】近年、共依存、過干渉、虐待など親子関係に関する問題が年々増加傾向にある（厚生労働省、2020 など）。特に社会問題化している虐待の研究から始まり、注目を集めている概念に役割逆転（role reversal）がある。山田・平石・渡邊（2015）は、役割逆転には（1）親が子どもに情緒的サポートを与えない、（2）子どもが親に対して情緒的サポートを与える、（3）親は子どもに過剰な期待を課す、（4）親は子どもに対して屈折的甘えを呈する、という4つの特徴があると指摘し、役割逆転が見られる大学生の場合、行動・認知の両面において、対人不適応傾向が助長されることを明らかにしている。そこで本研究では、大学生の親子関係における役割逆転のスタイルを確認し、役割逆転群に焦点を当て、他の群と比較することにより、自己に関する諸特性を明らかにすることを目的とする。仮説は以下の4つとした。仮説1：役割逆転群は、自身の認知・行動面における自己決定力が低い。仮説2：役割逆転群は、自尊感情が低い。仮説3：役割逆転群は、感情・欲求における社会的自己制御が高い。仮説4：役割逆転群は、ネガティブな社会志向性が高く、ポジティブな個人志向性が低い。

【方法】調査対象者：関東の大学に通う大学生 381 名（男性 180 名、女性 201 名）、平均年齢 20.01 歳（SD=1.49）に Web 調査を実施した。調査内容：①役割逆転尺度（山田他、2015）16 項目と独自に作成した役割逆転の行動面に関する尺度 3 項目 5 件法。②自己決定とコンピテンスに関する大学生用尺度（桜井、1993）17 項目 5 件法。③自尊感情尺度（山本・松井・山成、1982）10 項目 5 件法。④社会的自己制御尺度（原田・吉澤・吉田、2008）9 項目 5 件法。⑤個人志向性・社会志向性尺度（伊藤、1993、1995）15 項目 5 件法。⑥フェイスシート

【結果・考察】役割逆転群を抽出するために、Ward 法によるクラスター分析を行った結果、役割逆転群、母子疎遠群、母子円滑群の3つのクラスターが得られた。次に、3つのクラスターを独立変数、自己に関する諸特性を従属変数とした1要因の分散分析を行った結果、役割逆転群は母子円滑群よりも、自己決定感得点と自己決定欲求得点が有意に低く、仮説1は部分的に支持された。役割逆転が生じた場合、母親からの要請や意思を重視することで、子どもは他者の欲求にとらわれてばかりになってしまい、自分で決めているという感覚が持てず、自己決定欲求を低下させたと考えられる。また、役割逆転群は母子円滑群よりも、自尊感情得点が有意に低いという結果から、仮説2は部分的に支持された。役割逆転が生じている場合には、親子間での葛藤があっても親からの期待などを受け入れ、他者からの評価にとらわれることで自分自身を価値ある存在だと認めることができず、自尊感情が低くなったと考えられる。さらに社会的自己制御得点においては、役割逆転群は母子円滑群よりも有意に低くなり、母子疎遠群とは有意差が見られなかったという結果から、仮説3は支持されなかった。役割逆転が生じている場合には、社会的場面における対人的な不適応さから自己を主張してしまい、自分の考えや意思を抑制する能力が低くなった可能性が推測される。最後にネガティブな社会志向性得点について、役割逆転群が他の2群と比べ有意に高く、ポジティブな個人志向性得点においては、役割逆転群は母子円滑群よりも有意に低い結果から、仮説4の前半は支持され、後半は部分的に支持された。役割逆転が生じている場合、相手の顔色を窺い、人前では見せかけの自分をつくってしまうなど、社会の中での適応が困難であると考えられることから、情緒面でも対人行動面でも不適応状態であるネガティブな社会志向性が高くなり、自己実現に近い特性であるポジティブな個人志向性が低くなったと考えられる。